

回避したが、2006年の付録診断基準(3)で「薬物中止による確認条項」が廃止され、より現実的な基準になった。なお ICHD-I では、原因除去による頭痛の消失または改善の要件は、MOHを含むすべての二次性頭痛の診断基準の原則とされていた。

(注：D. 頭痛は原因疾患の治療成功または自然寛解後、3ヵ月以内に大幅に軽減または消失する)。

日本頭痛学会では、2007年に、頭痛学会誌特集号に見られた不適切な部分を改訂し、MOHと慢性頭痛の改訂・付録版を収録した「新訂増補日本語版」(4)を医学書院から刊行した。この新訂増補日本語版が最新かつ正式な頭痛分類である。日本頭痛学会ではICHD-IIのポケット版も発行しているが、新しい動向は追補版でupdateしている。最近このポケット版の内容を、スライドキットとして日本頭痛学会のサイト(<http://www.jhsnet.org/>)に公開したので、ご利用いただければさいわいである。

2009年、国際頭痛学会の分類委員会から、二次性頭痛の診断基準改訂の方針と二次性頭痛の一般診断基準の雛形が公表された(5)。MOHを含む二次性頭痛は、その治療が必ずしも可能とは限らないため「治療成功条項」があると診断が確定できないことになる。この条項は厳密ではあるが実践的ではない。この点を解決しようとする動きが、今回の新標準化一般診断基準の提案である。この二次性頭痛の診断基準改訂の方針には以下のように述べられている。・慢性片頭痛とMOHの診断基準改訂版は早急に診断基準本体に組み入れられるべきであるので、分類委員会はICHD-IIの限定的な修正作業を開始し、ICHD-II Rとすることを決定した。・これには、MOHと慢性片頭痛を含む二次性頭痛の新提案が盛り込まれる。・2010年にICHD-II RをCephalalgiaの増補として、発行する予定である。・ICHD-II Rはその後適切な期間、おそらく10年は変更がなされず、次回の変更はICHD-IIIとして全面的な改訂となるであろう。

本ニュースレターは国際頭痛分類に焦点をあてて動向を述べさせていただいた。執筆中たまたま開いた頭痛患者のブログに「今回私の行った****科のドクター、いかにも面倒くさいオーラ出ているので二度と行きたくありません・・・」と書き込まれていた。患者さんにこのよう不快な思いをさせないように、われわれ日本頭痛学会員は努めていかなければならないと痛感した次第である。

文献

(1)The International Classification of Headache Disorders: 2nd edition. Cephalalgia. 2004; 24 Suppl 1: 9-160. 邦訳は日本頭痛学会雑誌. 2004; 31:13-188.

(2)Silberstein SD et al, Cephalalgia 25:460-465, 2005. 解説と邦訳は五十嵐久佳ら:日本頭痛学会誌, 33:26-9, 2006.

(3)Olesen J et al:Cephalalgia 26:742-746. 2006. 解説と邦訳は竹島多賀夫ら:日本頭痛学会誌. 34:192-193, 2007.

(4)国際頭痛学会・頭痛分類委員会: 国際頭痛分類第2版 新訂増補日本語版. 東京:医学書院; 2007.

(5)Olesen J et al: Cephalalgia 29: 1331-1336, 2009. 解説と邦訳は竹島多賀夫ら:日本頭痛学会誌, 36:235-238, 2010.

~~~~~

## 2) 学会誌の目次案内 37巻1号 2010年 (敬称略)

1. 平田幸一. 会長講演 頭痛をめぐる冒険. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):1-3.

2. 坂井文彦. 教育講演1 これからの頭痛学会のあり方. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):4-5.

3. 安藤直樹, 岡西徹, 小林悟, 服部文子, 藤本伸治, 石川達也, et al. 喜多村賞

「当院頭痛外来を受診した小児頭痛の分類と特徴。」 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):6-8.

4. 喜多村孝幸, 戸田茂樹, 寺本明. シンポジウム1-1 低髄液圧症候群. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):9-12.

5. 寺本純. シンポジウム1-2 緊張型頭痛と二次性頭痛の鑑別. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):13-6.

6. 北見公一. シンポジウム1-3 頸原性頭痛(cervicogenic headache)の見直し. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):17-20.

7. 宮本雅之. シンポジウム1-6 睡眠障害と頭痛. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):21-5.

8. 竹島多賀夫, 今村恵子, 房安恵美, 古和久典, 中島健二.

シンポジウム2-1 Matrix metalloproteinase-9 (MMP-9)と片頭痛. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):26-31.

9. 清水利彦. シンポジウム2-2 TRPV1受容体と片頭痛. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):32-4.
10. 渡邊由佳, 田中秀明, 木元一仁, 高嶋良太郎, 南本新也, 平田幸一.  
シンポジウム2-3 トリプタンの作用部位を探る「近赤外線分光法と皮膚レーザー血流計をもちいた検討」  
日本頭痛学会誌. 2010;37(1):35-9.
11. 北島敏光. シンポジウム2-5 頭痛に関するペインクリニックの進歩. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):40-3.
12. 麻生俊彦, 麻生謙二, 福山秀直.  
シンポジウム2-6 MRIによる頭痛の脳血流・血管反応. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):44-5.
13. 小山慎一, 河村満. シンポジウム3-1 輪郭に対する過敏性と視覚性前兆. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):46-8.
14. 辰元宗人, 斎須章浩, 相場彩子, 平田幸一. シンポジウム3-2 視覚・臭いと過敏性. 日本頭痛学会誌.  
2010;37(1):49-53.
15. 柴田興一. シンポジウム3-3 VEP. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):54-60.
16. 五十嵐久佳. シンポジウム3-4 女性と脳過敏. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):61-4.
17. 竹島多賀夫. シンポジウム3-5 過敏症と片頭痛診断基準. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):65-72.
18. 端詰勝敬. 生涯教育セミナー(初級) 心理的バックグラウンドをもった頭痛患者. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):73-5.
19. 藤田光江. 生涯教育セミナー(上級) 子供の頭痛の診かた. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):76-81.
20. 日本頭痛学会. 第3回頭痛専門医認定試験実施について. 日本頭痛学会誌. 2010;37(1):82-5.

~~~~~

3) 最近の頭痛研究トピックス

この度、広報委員会で討議した結果、頭痛診療に役立つ臨床的な研究報告、または頭痛診療に関連のある疼痛学の基礎的な研究成果を掲載した最近の論文内容を紹介するコーナーをホームページに新設することとなりました。

本ホームページを利用される皆様にご活用頂ければ幸いです。これまでにない試みなので、皆様からのご意見をもとに、より良い形で運営していければと思っております。詳細は頭痛学会ホームページ (<http://www.jhsnet.org/>) の TOPICS 6月23日をご参照ください。(慶應義塾大学神経内科 企画広報委員 柴田 護)

1. Resolvinの炎症性疼痛に対する効果 Xu Z-Z, et al. Resolvins RvE1 and RvD1 attenuate inflammatory pain via central and peripheral actions. Nat Med 2010;16:592-598.
2. トピラマートの片頭痛予防効果と前兆発生抑制効果についての研究
Reuter U, et al. Migraines with and without aura and their response to preventive therapy with opiramate. Cephalalgia 2010;30:543-551.
3. 慢性緊張型頭痛における中枢性感作成立に関する検討
Cathcart S, et al. Noxious inhibition of temporal summation is impaired in chronic tension-type headache. Headache 2010;50:403-412.

~~~~~

### 4) 第38回日本頭痛学会総会 開催と演題募集のご案内

学会に関する最新の情報は総会ホームページ (<http://www2.convention.co.jp/38jhs/>) にてご案内中です。

一般演題登録締切を8月16日(月)まで延長いたしました。ぜひご参照ください。

第38回日本頭痛学会総会 会長 片山 泰朗

1. 開催概要 会期: 2010年11月19日(金) ~ 20日(土)

会場: 東京ドームホテル

〒112-8562 東京都文京区後楽1-3-61 TEL 03-5805-2111 FAX 03-5805-2200

